

拡大するイスラエルの軍事行動～なぜ、そしてこの先

1. はじめに

●進行中のイスラエル国防軍 (Israel Defense Forces (以下 IDF)) の軍事作戦

- 2023 年 10 月ガザ地区周辺で生じたハマスによるテロ攻撃をきっかけ
- 開始され 1 年以上が経過 (イスラエル軍事史上最長)
- ガザ地区に 4 万人を超える死者、建物 6 割以上が破壊
- おびただしい難民の発生、人道危機の様相
- 国連をはじめ多くの国々が批判の声



破壊されたガザ市街

●ネタニヤフ首相の戦争政策



ネタニヤフ首相

- 軍事行動は止まるどころかさらに国外へ拡大
 - ✓ イスラエルの支援者たる米国の中東地域での影響力が低下
 - ✓ 地域の秩序が変化する可能性すら懸念
 - 苛烈な軍事行動の理由？
 - ✓ 極右政党との連立維持や自身の刑事訴追を回避したい首相の政治的或いは個人的な思惑？
- とはいえ、イスラエル国民の支持は明らか。



Q. なぜガザでの軍事行動があれほど苛烈で、また国外へと広がるのか。



まめ知識

- ユダヤ人とは「ユダヤ教徒または母親がユダヤ人」→「人種」ではない。→「ユダヤ国家」とは「ユダヤ教徒の国」
- ローマ帝国に追われ、キリスト教中心となった世界で孤立したマイノリティとして生きてきた歴史
- 各国での迫害「ポグロム」や「ホロコースト」の歴史的記憶



■ : パレスチナ自治区 (ガザ地区及びヨルダン川西岸)

- 2000 年ぶりのユダヤ人国家としてのイスラエル建国 (1948 年)
 - 一方で故郷を追われたパレスチナ人→解けない対立
 - 建国から現在まで反イスラエル勢力と常に対峙 →中東戦争、パレスチナ・テロ、ヒズボラ、イラン
- 政治的にまとまりづらい民主主義国
 - 純粋なユダヤ国家を目指す (右派) のか、他民族との融和を目指す (左派) のか
 - 多数政党乱立、連立少数与党の政治体制 → 小政党が政治のキャスティングボードを握り易い。

2 はじまり～2023年10月7日の衝撃

ハマスの大規模テロ攻撃

- 23年10月7日早朝の攻撃
- ガザ地区へ侵入したハマス武装勢力によって、周辺の30カ所余りのイスラエル人集落や軍施設が襲撃され、1,200人以上が殺され255人が拉致された。

●周到に準備されたテロ攻撃～高度に電子化された警戒監視網の突破

- ✓ ドローンによる通信インフラ破壊
- ✓ 全ての情報が途絶、軍事施設や集落は為すすべなく占拠された。
- ✓ 侵入した武装勢力は数日のうちに排除されたものの、テロ現場の悲惨な状況と犠牲の大きさが判明



襲撃されたイスラエル市民の車



●イスラエル世論の沸騰と戦争の開始（23年10月）

- ハマスへの報復と人質の奪還を求め沸き立った世論
- ネタニヤフ政権は30万余の予備役軍人を召集、ハマスに対しイスラエル国として56年ぶりとなる「戦争」を宣言
- 一週間後、IDFは空爆による建物の破壊と地上部隊による武装勢力の掃討を開始
- IDFの侵攻はガザ北部から南へ拡大し、終始戦いの主動を維持したままガザ地区全体へと拡大



ガザへの空爆



破壊されたガザ市街

3 近年の反イスラエル勢力との戦い



イスラエルは第2次大戦後の独立以来、敵対する周辺アラブ諸国と戦ってきた

- 現在の脅威はイスラエルを敵視するイランに支援された非国家組織からの攻撃と考えられている。
- IDF が最初に重視したのは自爆テロや銃撃を繰り返すハマスなどパレスチナ武装勢力
- 人口密集地に潜むテロリスト

- 軍服や階級章を身に着けているわけもなく時に一般市民との弁別すら困難
- IDF の作戦は次第に厳しさを増し、2000 年頃からは戦車など大型火力も投入してテロリストと目される者の掃討。軍事行動を見せつけることでテロの抑止を図る。
- 市街地で大規模な軍事作戦を展開は一般市民へ大きな被害
- イスラエルの軍事行動は次第に国際的な非難



イスラエルの軍用UAV

- ピンポイントで目標のみを攻撃する新たな戦術を開発
- ヒュミントや電話傍受などを駆使してテロ組織の幹部など特定人物の行動を把握
- 無人機などから発射する誘導ミサイルによって狙った目標だけを排除
- 併せてガザ地区やヨルダン川西岸地区との境界に高さ 8メートルにも及ぶ高い壁やフェンス



- 世界で最も進んだ対テロ戦能力を有するとの自負



テロリストの侵入を防ぐ壁

● IDF の戦いの場は、その後周辺国へ拡大



ヒズボラの兵士

- 相手は隣国レバノンに所在する武装組織ヒズボラ
- ✓かつて 1982 年に起きたレバノン国内の騒乱を機にイスラエルはレバノンへ進駐、これへの抵抗組織として生まれた民兵集団
- ✓イランに支援される武装組織へ変化
- ✓レバノン政府すら手出しできない勢力として同国南部一帯を支配
- 2000 年にイスラエルはレバノンから全面撤退、その後北部境界付近でヒズボラとの小競り合いが継続

●2006年7月、レバノン境界で IDF 兵士襲撃事件が発生



IDFのレバノン侵攻を伝えるニュース

- 間髪入れず IDF は機甲部隊を先頭に境界線を越え兵士の捜索を開始
- この時まで IDF はヒズボラについて、イランの支援を受けてはいるものの所詮は軍事能力に劣る民兵集団と侮っていたところ、思いもよらない事態に直面



- ✓ IDF の機甲部隊がレバノン領内へ侵入するやヒズボラは激しい対戦車ミサイル攻撃
- ✓ IDF が投入した約 400 両のメルカバ戦車のうち 50 両近くが被弾し、20 両が撃破
- ✓ イスラエルの誇る同戦車が戦闘で撃破されたのは初めて
- ✓ 戦車ばかりでなく歩兵も対戦車ミサイルのスタンド・オフ攻撃に晒され、一ヶ月余りの戦闘で120名もの戦死者
- ✓ イランを後ろ盾とするヒズボラは、イスラエルが気づかぬうちに大量の誘導ミサイルで武装し、より洗練された軍事能力を獲得していた。
- ✓ またヒズボラがイスラエル北部へ向け連日100発以上の旧式ロケット弾を発射
- ✓ IDF はレバノン領内への深入りを避けたため、より深部から発射されるこれらのロケット弾に全く対抗できず。



負傷者を収容するIDF兵士



撃破されたメルカバ戦車

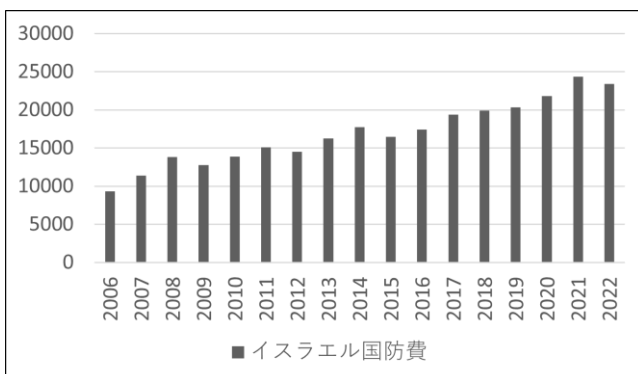


十分な準備のないまま突入した 2006 年のヒズボラとの戦いは国民の期待と裏腹に全くの消化不良に終わった。その結果、国民の IDF への不信感と国防への不安感を招き、以後 IDF は ヒズボラとの再度の対決を強く意識

- 戦闘終結後も、イスラエル国民の間では停戦に応じるべきでないとする意見が 50% 超
- ただちに国防費増額を開始
停戦を決めた中左派オルメルト首相の支持率は 14% へ急落



➤ 2009 年、極右ネタニヤフ政権誕生へ



ネタニヤフ首相

●新たな軍事的試み CBW（Campaign Between Wars；戦争間軍事行動）

- レバノンに所在するヒズボラを叩くには再び国境を越えねばならず、待ち構えるヒズボラとの厳しい戦いになる。



- そこでヒズボラとの再度の対決（War）を前提に、その前に小さな打撃を繰り返し加えて弱体化させておこう
- 年間約 30 回にもわたりヒズボラの陣地や武器集積地を空爆し、また戦闘員を殺害
- ただ CBW はレバノンやシリアなど他国領内で行うため国際的な非難も受けやすい。
- このため攻撃は目立たないよう小規模かつ隠密裏に行われ、他国からは見えにくい軍事行動

- とはいえ両者の間には暗黙に、攻撃は一般市民を対象とせず、かつ加えられた攻撃へは相応の報復にとどめる、という相互抑制的なルールが働いていた。

- ヒズボラにすれば IDF と激突すれば痛手を被ることは明らか
- IDF にとっても南のパレスチナと北のヒズボラの 2 正面の戦いは避けたい

- 一方、CBW には副作用が

- 相手の領域に繰り返し侵入し攻撃を加えることへの反感増
- 逆に反イスラエル勢力全体の結束を促すことに



まさに 10 月 7 日のテロ攻撃は、こうしたリスクが蓄積された結果、他勢力の支援を受けたハマスによる奇襲となったと考えられる。



空爆されるレバノン南部

●最大の脅威ヒズボラ ～ 10 月 7 日ハマスのテロ攻撃直後のイスラエルの反応



➡ IDFの動き

- ガザでハマスの攻撃が始まったと知るや、イスラエルは北部境界地帯へ IDF 3 個師団を急派
- 境界から 5 キロメートル内に住む全てのイスラエル住民に避難命令、約 6 万人が避難
- イスラエルの国防相や IDF 高官はヒズボラを叩くためレバノンへの侵攻を主張

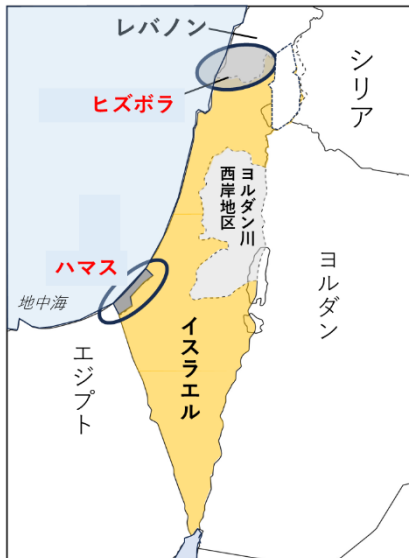


ガザからのテロ攻撃を受けイスラエル政府が最も懸念したのは、南のハマスに呼応したヒズボラによる北からの挟撃

バイデン米大統領の声明「Don't（するな）」
 ❖ 10月9日、米バイデン大統領は、イスラエル支援の姿勢を示しつつ、一言「Don't」と声明を発し、イスラエルに向かって事態をヒズボラとの交戦へエスカレートさせないように求めた

4 ガザでの軍事行動の意味

- ハマスのテロ攻撃がイスラエル国民へもたらしたもの
 - 絶対の信頼を寄せてきた防壁が破られたことへの不安
 - 1400 人も同胞が虐殺、拉致されたことへの怒り
 - 北のヒズボラと南のハマスの2つの敵から同時に攻撃されることへの恐怖感
 - ❖ 迫害の歴史的記憶を今も維持するユダヤ民族にとって挟撃され追い詰められることは悪夢



❖ 南北からの挟撃を受ける危険を取り除く必要

- 主たる脅威 **ヒズボラ** → 直ちにヒズボラの掃討へ乗り出すリスクは大、より慎重に臨む必要がある
- ガザに閉じこもる **ハマス** → 軍事力をもって一思いに掃討することが期待できる

まずは南のハマスの脅威を完全に排除することが選択された

それゆえに、ガザでどれほど人的・物的被害が広がり国際的な非難を浴びようとも、また捕らわれているイスラエル人の人質の生還が危ぶまれようとも、ハマスを根絶やしにするまでガザのへ攻撃は止まることがない。

● IDFの軍事行動の大きな問題点

- IDFが攻撃の対象とするハマスと、攻撃の対象外であるべきガザの一般市民との間に明確な境界線がないまま攻撃が継続
- この結果、作戦のゴールは曖昧になり、また過剰ともいえる一般市民の死傷や市街の破壊が発生

- 軍事行動の客観的な正当性が大きく損なわれている。
- さらにイスラエルの国際的な孤立を招き、交渉など武力行使以外の解決の可能性を自ら狭める。

5 戦線の拡大



✓ 昨年 9 月 17 日、ネタニヤフ首相はガザでの軍事行動について、北部境界地帯から避難を余儀なくされている 6 万人のイスラエル住民が帰還できる日まで継続すると宣言

ガザでの軍事行動はハマスのみならず北部のヒズボラとの対決ともリンクされ、より大きな反イスラエル勢力全体との戦いへと位置づけ

ヒズボラへの攻撃拡大

- ✓ 23年9月、レバノンでヒズボラのメンバーが携帯電話代わりに所持していた数千個のポケットベルや携帯無線機が一斉に爆発
- ✓ また間髪おかずレバノン南部一帯への大規模な空爆が加えられ1600カ所に及ぶヒズボラの拠点などを破壊
- ✓ さらにIDFはレバノンの首都ベイルートの住宅地にあるヒズボラ指導者ナスララの居宅を空爆し、ナスララを殺害



首都ベイルートへの空爆



- ごく短期間のうちに実行された、大がかりで綿密な一連の攻撃
- ヒズボラ組織の頂点たるナスララの殺害を当初から企図？
- それに至る一連のプロセスとして10月7日のテロ攻撃を受ける以前から入念に準備

この機に IDF はレバノン南部へ精鋭部隊による限定的な地上侵攻に着手し、北部境界地帯のヒズボラの拠点や武器貯蔵庫などを破壊するとともに数百名の戦闘員を掃討

→ 06年に苦杯をなめさせられたヒズボラへの遺恨を晴らす再戦の到来

フーシ派（イエメン）への攻撃



23年9月、さらに IDF はステルス性能を持つ F35 を用いてイスラエルから遠く離れたアフリカ中部のイエメン国へも空爆

* 武装組織フーシ派
= イランに支援された反イスラエル勢力

- イエメンはイスラエルから約2000キロメートル離れており、これはテヘランへの距離と同等
- この攻撃はフーシ派のみならずイランの指導者層へ、イスラエルは地理的距離や国境線にかかわらず精密な空爆を実行しようとのメッセージ



イエメン空爆

イランとの直接交戦



2024年4月、シリアにあるイラン公館を空爆、イラン革命防衛隊幹部殺害を契機に**限定的な空爆の応酬**

✓イランは弾道ミサイル、巡航ミサイル、UAV など複合手段でイスラエルを空爆

✓イスラエルもイランへ報復爆撃



6 現状分析：「イスラエルの姿勢の変化」

- ✓ **イスラエルの軍事行動は敵の勢力を弱化させるための CBW（戦争間軍事行動）から一転し、大規模な空爆や地上侵攻を含む反イスラエル勢力全体との対決へと切り替わった。**
- ✓ またそこではイスラエルを攻撃しようとする者はたとえ外国に所在しようとも軍事力をもって排除する、という**恫喝の意味合いが強まった。**
- ✓ つまりイスラエルは、これまで暗黙に維持してきた相互抑制的なゲーム・ルールを、**予告ない組織指導者殺害の恫喝と躊躇ない大規模制裁へと書き換えた。**
- ✓ そしてこの**書き換えを促したのは、10月7日のテロ攻撃により国民が受けた衝撃、怒りそして恐怖**であったと想像できる。
- ✓ 変化を下支えする軍事的要素～イスラエルの防空能力の向上
 - IDFの戦力はハマスやヒズボラ、イランと比較して優位。現状、反イスラエル勢力がイスラエルへ対抗しうる軍事手段はミサイルやロケット弾などに限られる。
 - これら経空兵器の破壊力は物理的には大きくないが、その威力自体よりも国民へ与える心理的なダメージが大きく、それへの対応はIDFの課題。
 - そこでIDFが開発に力を入れてきたのは弾道ミサイルや短距離ロケット弾などを迎撃する**高性能な対空兵器群**。イスラエルを支援する**米国などの防空支援もこれを補完**
 - IDFによればガザでの戦争開始からの1年間にイスラエルへ飛来したミサイルやロケット弾などは26000発以上に及び、IDFの防空網はこれらの大部分を撃墜することに成功



イスラエルが空からの脅威へ対抗する有効な手段を手に入れ、**反イスラエル勢力がイスラエルへ痛打を加えることが難しくなった**こともイスラエルの姿勢の変化に大きな影響

7 IDFの軍事行動の限界

米国や西欧諸国はイスラエルの行動に一定の理解を示すが、すでに国の境界を超えてしまった IDF の軍事行動の行きつく先がどこにあるのか見えない状況

- ✓ 国民の恐怖感から生じた軍事行動は、論理的にはその恐怖感が癒えるまで継続される。仮に懸念する脅威を排除しきるまで止まらなるとすれば、そのゴールは **イスラエルの最も大きな懸念、すなわちイランの核武装の阻止** にたどり着く。つまり **イランの核開発関連施設への攻撃に踏み切る可能性は捨てきれない**。
- ✓ しかし **イスラエルの軍事行動が今後も直線的に拡大し続けることはあり得ない**。
 - 戦闘を維持するには大量の資源、特に武器弾薬が必要
 - 1年以上続いている戦争は IDF がこれまで経験したことのない長期戦
 - 特に **防空ミサイルや精密誘導弾のストックには限界**が見え始め、例えばレバノンへの地上侵攻が「限定的」となっているのは IDF の後方補給が限界に近いことを暗示
 - **現在のイスラエルの大量の弾薬消費を支えているのは米国などからの支援**であり、この支援が途切れる時点が即ち IDF の前進限界
- ✓ また **人的資源の限界**もある。
 - 総人口 1000 万人に過ぎないイスラエルが働き盛りの市民を数十万人も予備役召集
 - 戦争優先の施策を維持し続けることで **国の経済へ与える影響は甚大**、戦争開始以降の経済成長率が大きく落ち込み
 - さらに戦線が拡大するにつれ見込まれる兵士の死傷の増加は国民の感情を大きく揺さぶることにもなる

イスラエルの弱点はまさに「人的・物的資源の少なさ」

- ✓ 一方、イスラエルから予想外に迅速な攻撃を受けた反イスラエル勢力はおしなべてショック状態にある。
- ✓ **ガザのハマスは壊滅に近く、またヒズボラも指導者を失い指揮系統が麻痺しており、後ろ盾のイランとともに対イスラエル戦略の練り直しは必至**
- ✓ ただ彼らの強みは「人間の数」である。さまざまな国に散らばる **反イスラエル勢力のネットワークは、どこか数カ所が破壊されても全体が破綻するとは考えにくい**。
- ✓ 現在の IDF の攻勢が止んだ後、イスラエルへの反感とそれに基づく連帯は再び活性化し、**時間をかけて何らかの形で再び攻撃を試みる可能性**
- ✓ それは今回イスラエルが書き換えたゲーム・ルールのままに予兆ない要人の暗殺や大規模攻撃となるかもしれない。



イスラエルと反イスラエル勢力は、これから長期にわたる持久戦へと突入した

8 おわりに

- ✓ ハマスのテロ攻撃で受けた衝撃が生み出したイスラエル国民のハマスへの報復の声は、閉じられたエコチャンバー（反響部屋）の中で繰り返されるうちに強められ、今や反イスラエル勢力全体への攻撃を求める声へと変化した。本来こうした現象を現実の中で抑制するのは首相や軍人リーダーであるはずだが、今は彼ら自身が戦争継続の動機を持ち、むしろそれを助長している。
- ✓ かつてイスラエルは、中東和平の枠組みの中でパレスチナの指導者と握手することもあったし、最近では米国の仲介でサウジアラビアなどイスラム国家との連携を模索するなど、安全保障手段の多様化を視野に入れていたはずであるが、ここ一年で再び軍事力への依存へ回帰した。さらにその方法もより暴力的な方向へ向いている。
- ✓ こうした選択は、その先に得られる安全保障上の効果と半面生じるリスクを勘案して選ばれたものとはとても思えない。むしろハマスのテロ攻撃によって揺り起こされた感情から反射的に手に取った安全保障のカードと思われる。たしかに IDF という軍事カードは強力だが、一枚きりのカードである。その恫喝と制裁による効力は果たして今後も持続できるかは疑問。
- ✓ 戦線の拡がりが続く一方で、IDF が戦いに注ぐ人的、物的資源のひっ迫や米国など支援国からも上がる疑問の声など、さまざま現実的な制約も増している。この先にイスラエルの軍事行動がどこで立ち止まるのかは、IDF の後方補給能力という物理的問題であると同時に、今後イスラエル社会が人々の抱える内なる恐怖とどう向き合っていくのかという社会的、政治的な問題である。